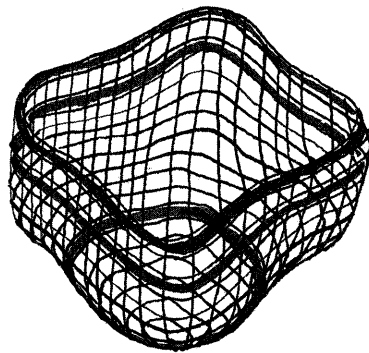


南の島の子どもたち(2)

想像性が豊かな

ホノカちゃんのこと

浅野 恵美子



「幽霊がつどう幼児期」という言葉は、シェリィという英国の詩人が「縛めを解かれたプロメテウス」で使ったようである。この言葉が私の心をひきつけてから久しい。この言葉には、子どもの心理への洞察と人間の心の興味ある仕組みへのヒントが語られるように感じられ

る。

子どもたちは、幽霊ばなしが大好きである。先回、話題にしたM保育所の子どもたちも幽霊ばなしが大好きだ。そうで保母たちは自作の幽霊ばなしを聞かせているようだ。それは、語り聞かせという形で、7、8月の保育内容の中にすっかり入っていた。思い起こせば、沖縄で生まれ育った私自身、幼年時代には、幽霊のはなしを聞くことが大好きであった。自分でも幽霊話を作り、小さい子どもたちに聞かせることもしたものだ。

子どもたちの幽霊好きは、空想や想像の世界での遊びとつながっているようだ。私は、保母養成にかかわっている関係上、学生の実習を視察する為に保育園を訪れることがある。私が訪問すると子どもたちは、興味を示して寄ってくる。彼らの期待に応えて遊んでやると、単純な遊びのおいかけっこからおぼけごっこへと発展する。ある時、私は、ユウレイと言いつつ手をだらりと示して追いかけた。すると、追いつかれ捕まえられそうになった一人の男の子は、恐怖で腰をぬかして、私にヤメテク

レとまなざしで懇願した。私は、彼の恐怖に逆にショックを受けた。この子は、私の心より、想像上の幽霊を見ていると思った。自分たちがつくったイメージをこんなにもいきいきと実感できることが驚きであった。

何処でも子どもたちは、幽霊が好きと思われるが、特に沖縄という地域は、幽霊たちがいきいきとその存在を受容されている地域であると思う。子どもにとって、我々にとって幽霊とは何なのか。今回は、そんなことを幽霊を恐れたホノカちゃんと共に考えてみることにする。

ホノカちゃんのこと

ホノカちゃんは、沖縄の中心、那覇市から、車で約二時間以上かかる北方の地、本部町にあるドリム保育園の二歳児クラスに在籍している子どもである。私が彼女のことを知ったのは、沖縄私立保育園連盟乳児保育研究会での研究発表を通じてである。この研究会は、沖縄本島内の認可私立の各保育園から一、二人の参加で、毎月1回、午後2時―5時の勤務時間中の3時間、30人くら

いの参加で二ねんにわたってなされた。私は、顧問的に参加させていただき現場の様々な事例から学び、考える貴重な学習をさせていただいた。

ホノカちゃんは、この研究会で「園に慣れにくい子」というテーマで実践報告された。保母の実践記録から、ホノカちゃんのことをざっと紹介することからはじめよう。

登園拒否が激しかった一年目のホノカちゃん

ホノカちゃんは、せともの業を営む大卒の父親と短大の保育科を卒業している母親との間の第一子として誕生した。母親が、出産の為、1986年、4月、1歳9か月で入園している。毎日のように泣いて登園して、父親と保母たちは大変であったようだ。その頃も夜中、急に起きてなきだす睡眠障害はしばしばみられたようだ。

5月には、だいぶ落着きはしたが、登園拒否は続いていた。言葉がはつきりしていて、保母が「学校好き?」とか「先生好き?」とか聞くとどちらも「スキ」と答える

るが、家で親が同じ質問をすると「ガッコウイヤー」といい「センセイイヤー」と答えていたそうだ。そんな状態で、月の半分は欠席という状態であった。

8月、両親は、毎日登園拒否で子どもがかわいそうだから保育園を止めさせようかと相談している。保母たちは、朝、イヤーと拒否するわりには、登園してしまえばケロッとしているので様子を見ようと助言したようだ。

9月、運動会をきっかけにして園でも楽しそうに遊ぶようになったようだ。家では、学校（沖縄では保育園も学校と呼ぶことが多い）は「タノシイ」と言いつつも「イカナイ」と言うとのこと。

10月―12月、すっかり、園生活に慣れている様であり会話はなすが、友だちの側で遊んだり何か手伝ったり、絵本をつくり読みで聞かせたり、自分から友だちにとけこもうとする姿がみられるようになる。家でも、絵本を自分で創って読むのが大好きである。親におこられたことをいつまでも覚えており、何日かたってから人に教えたりするので、困るところもあるが、お話が上手に



絵本の「つくり読み」をするホノカちゃん

なり毎日が楽しいと母親からの報告。

1月―3月、担任の産休代替保母が又交替というハプニングがあったが、ペースをくずさず登園できた。

以上が一年目の大筋の様子である。一年目は、両親が家で商売をしていて休むことが可能であるという条件も手伝ってであろうと思われるが、出席率が非常に悪かったが、保育園には、慣れることができたようである。

作り話に凝った二年目のホノカちゃん

1987年、4月、2歳9か月。親、保母ともに一年目の反省をし毎日保育園に来ることを目標にしようとする。その成果があつて皆出席になったものの、無理をさせたのか、夜泣きやおねしょが続いた。子どもに合わせて登園させようと保母と母親とでまた反省。

5月、朝になると園に行くのをしぶる様になり、口実として「熱が出テルカラ休ム」とか、「先生が公園で遊ビナサイッテイテイタ」とか、思いつきで嘘を言うが

親に説得されて行く日もある。後半頃から、夜中おきだし母親の耳元で「アレッ、ダレカガイル」といってチョコウチヨを追うしぐさで「トツテチョコウダイ」といっては騒ぎ家中の人を起こす。そして、昼夜をかまわず、何かをみつけたように追いかけて遊んでいる。それを「ドラエモン、オバケノＱ太郎」だと言う。親は悩み、専門書等で調べたりして、第一反抗期の為と考えた。

6月、保育園では、元気がなく、かまってほしい甘えがみられる。午睡、寝つけず、ずっと起きていることがたまにある。

家では、園に行くのを拒否し、一人遊びをする。いろいろな物を並べて保育園や海洋記念公園だと示したり、子どもたちが遊んでいると空想して話す。「店ノ近クニ幽霊ガイルンダッテサー。先生モイッテイタヨ。ピンボートドアラ開ケタラ中ニイタヨ。先生ノソバニイテビツクリンタオイッテイタヨ。」と作り話を言う。幽霊ってどんなものかと聞くと両手で動作してみせ、「ドラエモン、コンナシテルヨ。」と話す。母親は、先月から続

いている作り話や動作が普通じゃないと感じ、母親自身、精神的肉体的に参ってしまった、病院に相談に行く。病院では神経的なものと診断される。両親は、変な行動を取るのには、自分に気をひかす為もあるのではと考え、ホノカが変な行動をすると同じように親もやる。

7月、3歳になる。遊びは、先月より多くなり、ケンカもたびたびみられる。盆踊りの練習ではおばＱ、ドラエモン音頭が流れるとおびえた様に保母の足にしがみつき恐がって踊らないが、毎日曲を聞いているうちに慣れてきたのか喜んで参加するようになった。午睡時、「オバケノＱタロウガイル」等とわけのわからないことを言う。何処にいるかと何度聞いても「イル」と言う。

8月、運動会の練習が始まると休みも少なくなり、練習に喜んで参加する。

9月―10月、笑顔が良くみられ、友達との遊びも活発になり、気のあう美知子ちゃんと二人で追いかけることをしたり、着替えを手伝ったりと一緒に過ごすことが多くなり楽しそうにみえるが、朝になるとやはり、「ガッコ

ウイカナイ」と拒否する時もある。園でもおしゃべりが盛んになり、友達同志で少しづつ話すようになってきている。保育日数25日中、6日欠席。

以上が二年目のホノカちゃんの様子である。保育園への出席率は、改善はされたが、全体として低い。言葉の発達が著しく、一人で話をつくりつつ、想像の世界で遊んだのである。幽霊がいるとあって保育を驚かすことは、少なくなったようだ。

ホノカちゃんの心をどう理解するか

育児というものは、理論通りにいくことは少なく混乱することが多いものだ。特に、第一子の場合は、試行錯誤的になってしまう。ホノカちゃんの両親も最初の子でかなり困惑したであろう。保母たちも少しばかり巻き込まれ動揺したようだ。親と共に悩んでいたからだ。

保育園拒否はあったが、言葉が達者で想像力の豊かなホノカちゃんであった。しかし、その想像力は、マイナ

スにも働いた。幼児期というものは、このように空想と現実が混同しやすい時期ではあるが、それだけでかたづけられることのできない問題もあったと思われる。

私は、この事例に出会った時、①ホノカちゃんの登園拒否は、本人の気持や欲求に合わせすぎたところからきていること、②夜中に何かを恐れる症状は、睡眠障害の夜驚というもので、特に想像力、言葉による思考力が盛んになる幼児期後期から、小学校低学年にかけて、けっこう頻繁にみられること、③ホノカちゃんの場合は、早い時期にでており、体を使つての遊びが少なく観念的な世界を育てすぎたきらいがあるであろうとコメントした。

このコメントの夜驚という診断が、以外にも母親と保母をホッとさせたようだ。保母も母親も、ホノカの幽霊や夜中の異常な振舞いに、うそとは知りつつも、科学的には説明のつかないものだと感じていたらしい。ホノカちゃんの行動は神秘的なものに映り、霊のことを扱うユタにでも相談に行かねばならないのだろうかと思ったこ

ともあったらしい。

考えてみれば、それは無理もないことだったかも知れぬ。子どもが見えないお化けを指さし追いかければ、誰でも気持悪くなってしまふ。私自身の経験でも、ホノカちゃんぐらゐの年齢で言葉が達者であった息子が「幽霊ガイル」と言っていたことがあり、嫌な気分であった。本当に幽霊が見えるのかしらと考えたものだ。

ホノカちゃんは、幽霊を見たのではなく、幽霊を想像したのだ。何故なら、ホノカちゃんの幽霊は、あのテレビや漫画でおなじみの明るいドラエモンであり、おぼQであったからだ。ホノカちゃんは、おぼQやドラエモンに何やら怖いイメージを拭き込んでしまったのだ。又、自分の不安を幽霊に語らせたのだ。

ホノカちゃんの保育課題

発表者である保母の作った乳児保育研究会の記録を読み直していると、ホノカちゃんの生活リズムについての質問が出ており、答えとして、夜おそく寝て、朝はいつ

も起こされてぐずる傾向があると報告されている。

睡眠不足は、大人でも妄想を引き起こしやすいのだ。

おそらく、ホノカちゃんに、親は厳しい態度がとれずに夜更しさせてしまいやすい状況があったろう。又、沖縄の雰囲気としてある夜更し文化も思い起こされる。沖縄は他県と比較して、就寝時間がおそく子どもの睡眠時間が短いということが指摘されている。

この厳しい態度がとれないということは、ホノカちゃんの気持や要求を大事にしたことであり、言語生活の豊かさに繋がったであろう。それが、同時に彼女の混乱にも繋がっていったのである。

子どもというものは、自分の内部の感性で何が良いもので何が排除すべきものかわからないと思われる。例えば、赤ちゃんの夜泣きであるが、やさしい両親が丁寧に付き合うといつまでも治らないが、ほっておくとおさまってしまうことは多い。子どもの小さな不安にも気づいてあげるとは、子どもの側からすれば、そのささいな不安が大きな実在的な不安になる可能性がある。ホノカ

ちゃんのお母さんの専門性にうらうちされた丁寧なやさしさが、裏目にでた可能性も強いと思う。

保育園拒否にしても同じことが考えられる。保育園に慣れるのに時間がかかりすぎているのだ。もし、彼女が外勤の母親の子であれば、現実の必要が慣れさせてくれなくてはである。

ホノカちゃんに、徐々に現実の必要を教え、学ばせることが課題であろう。その時、彼女の心は、健全に現実的に流れ、発達のペースを掴むと思う。

我々にとっての幽霊

ホノカちゃんの問題について私なりの見解を書かせていただいたが、彼女の問題は、多くのことを気付かせてくれる。幽霊や幻や不安は、心の秩序がしっかりできていない状況で、我々を振り回すのだ。子どもの心は心の秩序が確立しておらず、何でも受け入れてしまうのである。だから、子どもの心においては、幽霊たちの活躍の余地が大きいのである。

ところで、私は、幽霊を人間のおもいこみの産物として単純に片付けようと言うのではない。幽霊にも言葉として存在している以上、何かの役目があるはずである。沖繩では、戦後四十年すぎてなお、戦争で死んだ人のことが語られ、野ざらしになっている遺骨が一つひとつ拾われ、鎮魂の祈りが捧げられている。惨い戦争を体験した人々の心の中に、深く押し込められ語られずにきた幽霊たちが、語る時を得たかのようなのである。

幽霊は、人間の不安と想像の産物という側面もあるが同時に、愛されずに一生を終えた人への、生きている側の痛恨からも生まれているのである。人々は、幽霊を通して人間の心を語っているのである。幽霊とは、何よりも平和を希求する人間の心なのではないか。本当の平和が訪れた時、幽霊たちは、安心して眠りにつくのではないか。幽霊を恐れることなく、祈りをもって平和をつくりていきたいと思う。

(沖繩キリスト教短期大学)